

国立国語研究所学術情報リポジトリ

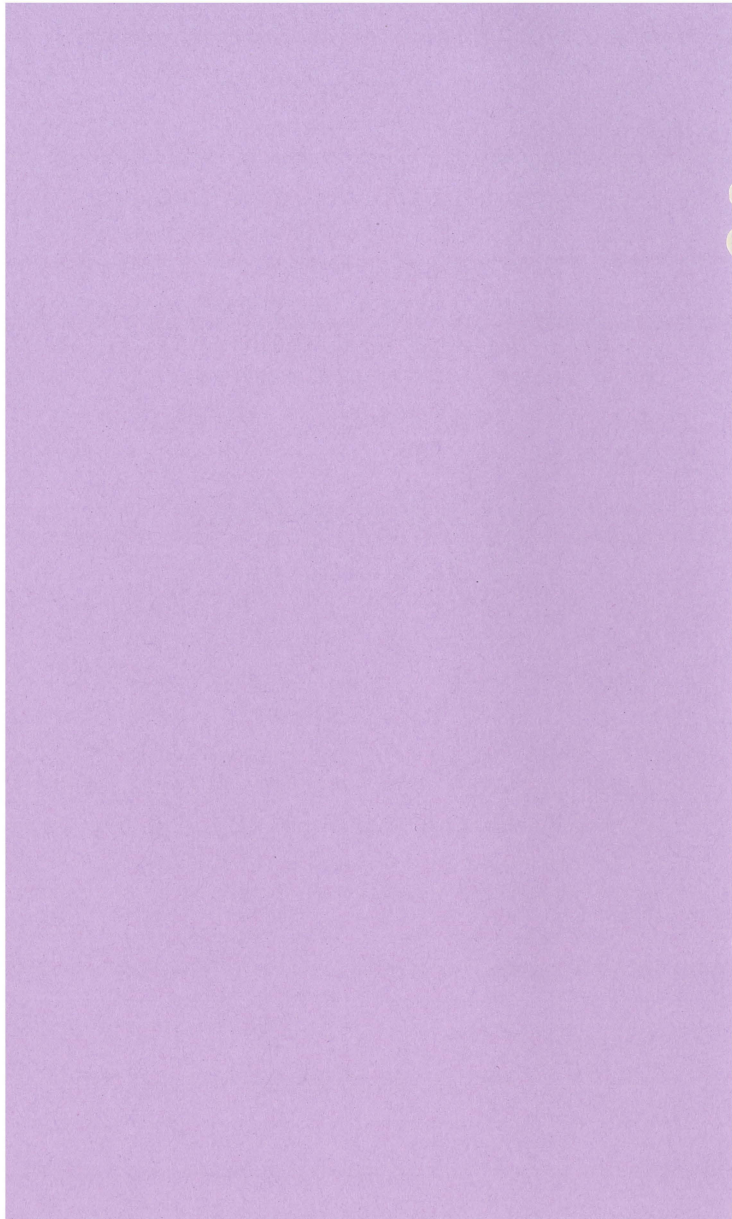
日本語の音声に耳を傾けると… 解説書

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-07-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/2879

国立国語研究所「ことばビデオ」シリーズ
〈豊かな言語生活をめざして〉5 解説書

日本語の音声に 耳を傾けると…

国立国語研究所



はじめに

国立国語研究所では、平成13年度から、「ことばビデオ」シリーズ〈豊かな言語生活をめざして〉を制作しています。これは、文化庁が昭和55年度から制作してきたビデオ・テープ・シリーズ「美しく豊かな言葉をめざして」を引き継ぐものです。このシリーズでは、国立国語研究所で行っている日本語や言語生活に関する調査研究の成果を生かしながら、音声や映像といった視聴覚素材の特徴を利用して、言葉に関する問題の提示や解説を行い、言葉をめぐる様々な事柄について考えたり話し合ったりするきっかけを提供していきたいと考えています。

平成17年度は、「日本語の音声に耳を傾けると…」という題で、既刊の作品で取り上げてきた話し言葉の土台である音声そのものを取り上げます。例えば、声の調子を変えることでどのような気持ちや意図を伝えているのか、方言の違いにはどのようなものがあるのか、外国人の話す日本語の音声にはどのような特徴があるのかなどについてわかりやすく紹介しています。この解説書は、ビデオを一層効果的に利用していただくため、制作意図を明らかにし、利用の際の留意点などについて述べたものです。

このビデオ・シリーズが、国語科や「総合的な学習の時間」などの教材として、あるいは大学等のコミュニケーション関係の授業や各種生涯学習の場などにおいて広く利用されることを期待いたします。

平成18年3月

独立行政法人 国立国語研究所長
杉戸 清樹

目次

＜このビデオの目的＞	1
＜内容＞	2
＜ユニットごとのねらい＞	2
＜シナリオ＞	6
＜資料＞	27
＜話し合いのために＞	30
＜参考文献＞	32
＜制作体制＞	33

<このビデオの目的>

私たちの言語生活は「話す」「聞く」「書く」「読む」という四つの領域から成り立っています。このうちの「話す」「聞く」は話し言葉による活動であり、<音声>を用いることにより行われています。<音声>を発信する活動が「話す」であり、それを受信する活動が「聞く」です。

話し言葉による言語活動は、このように音声を土台として行われています。しかし、私たちがコミュニケーションをする際相手に伝えようとしているのは音声そのものではなく、音声によって表現される意味の方です。そのため、音声自体を意識するということは普段あまりありません。また音声は、文字や絵と違い、それを発した瞬間から消えてなくなってしまうため、自分がどんな発音をしたかを意識することもあまりありません。

しかし音声は、私たちの話し言葉による言語活動を支える土台としての働きをしています。文字では表しきれないさまざまな情報も伝えています。

このビデオでは、ふだん意識することのあまりない音声そのものを取り上げます。私たちが言語生活でどのような音声を使っているか、それらはコミュニケーション上どのような働きを担っているか、音声であれば伝えられるけれども書き言葉では伝えにくい情報にはどのようなものがあるか、方言の音声や外国人の話す日本語の音声にはどのような特徴がありその背景にはどのような事情があるのかなどについて、日常のドラマの形で提示しました。この作品を御覧いただくことをとおし、日本語の音声について理解を深め、音声を用いてのコミュニケーションの豊かさと働きについて考えるきっかけを提供することを目的としています。

<内容>

作品は3話から構成されています。

第1話の「気持ちや意図を伝える音声」では、同じ表現であっても、声の調子を変えることによって、さまざまな気持ちや意図を伝えることができるということを見ていきます。また携帯メールなど書き言葉の場合に、絵文字などを使って気持ちや意図を伝える工夫をしている様子が出てきます。

第2話の「方言の中の音声」では、スポーツの全国大会の会場で、共通語とは異なる各地の音声（イントネーション）に接する場面が出てきます。続けて、東北地方に家族旅行をした姉弟が、地元の人が方言音声と共通語音声を、場面や相手により使い分けていることを知ります。

第3話の「外国人の話す日本語の音声」では、外国人が話す日本語を路上やレストランで耳にした大学生が、日本人の音声と異なる点や、外国人に共通する日本語の音声の特徴に気づきます。

<ユニットごとのねらい>

第1話 気持ちや意図を伝える音声（10分）

話し言葉では、同じ表現であっても、声の調子を変えることによって、さまざまな気持ちや意図を伝えることができるということを、中学生の麻美と加奈のエピソードをもとに紹介します。このエピソードでは、「本当」と「何やってんの」というセリフが、さまざまな声の調子で出てきます。例えば友達から「先生が結婚するんだって」と聞いて、「本当」と答えたとしみましょう。声の高さの変化や声の出し方、リズムの取り方など、声の調子を変えることによって、その情報に驚いたのか、がっかりしたのか、感心したのか、あまり関心がないのか、疑っているのかなど、自分のさまざまな気持ちや意図を相手に伝えることができます。

このような気持ちや意図などの情報は、文字にしてしまうと抜け落ちてしまいます。例えば「本当」も、このように文字だけでは、上に挙げたような気持ちや意図の違いは伝わりません。そのため、手紙やメールなどの書き言葉では、思ったように自分の気持ちを相手に伝えられなかったり、時には誤解を与えてしまうこともあります。そこで後半では、書き言葉で気持ちや意図を伝えることの難しさ、またそれを伝えるための工夫を、大学生同士が携帯メールでやりとりするエピソードを通して見ていきます。

話し言葉と書き言葉では自分の気持ちや意図を伝える方法やその難しさに差はあります。しかしいずれの場合でも、自分がどのような気持ちや意図でその言葉を使っているのかを相手に伝えることは、コミュニケーションをする上で大切なことです。

第2話 方言の中の音声 (14分)

〔前半〕中学生の純一とその姉で大学生の弘子は、卓球の全国大会の会場で、各地から応援に来ている人たちのいろいろな方言の発音を耳にします。①単語に決まったアクセントのない「無アクセント」地域でしばしば聞かれる平板なイントネーション、②北陸地方でよく使われる文末・句末のゆるやかなイントネーション（ゆすり音調）、③質問文における下降調のイントネーションに接し、自分たちの言葉と発音が違うことに興味を持ちます。

言葉の地域差というとき、共通語と異なる単語に注目されることが多いのですが、音声・アクセント・イントネーションの面でもさまざまな違いが見られます。普段の生活ではあまり意識しないで使っている音声にもさまざまな特徴があり、地域によって多様性があることに気づくことをねらいとしています。

〔後半〕音声（イントネーション）に方言による違いがあることを知った純一は、姉から方言のビデオを見せてもらい、山形県三川町ではカ行音をガ行音で発音していることを知りま

す。休みの日、純一は、三川町の隣町の鶴岡市に家族で旅行に行きます。

ビデオを見て、「雪」をユギと発音すると予想していた純一は、地元の店員さんがユキと共通語で発音をしていることにとまどいを覚えます。ホテルのフロントで純一は、従業員の人同士がユギと発音しながら会話をしているのを耳にし、相手や場面により共通語の発音と方言の発音を使い分けていることを知ります。

作品の中では、国立国語研究所が鶴岡市で調査した音声の使い分けに関する調査結果も示しています。

第2話の後半では、方言音声を使う地域ではいつも方言音声だけを使っているのではなく、相手や場面により共通語音声と使い分けていることに気づくことをねらいとしています。

第3話 外国人の話す日本語の音声 (8分)

近年、日本に住む外国人は増え、外国人登録者の日本の総人口に占める割合は平成16年末で1.55%となっています。仕事や勉強で来ている人や日本に定住する人、年齢も子供から大人までさまざまです。

このビデオでも、大学生の千春と香織はさまざまな外国人に出会います。そして、さまざまな特徴のある日本語を耳にし、普段接している日本語の音声と違いがあること、そのさまざまな違いの中にも共通した特徴のあることに気づきます。日本語教師を目指す弘子の説明を聞き、外国人の話す日本語の特徴にはその人の話している言語による背景があることを理解していきます。

しかし、実はそのような音声の多様性は、方言による違いなど日本の中にも存在します。さまざまな音声が存在する背景を踏まえずに音声の表面的な特徴だけをとらえて、その人の個人的な能力や人間性を判断してしまうことの問題に三人は気づいていきます。外国人の話す日本語の音声の多様性を考えること

を通して、これからの社会で多様な人々と一緒に暮らしていくためにはどうしたらいいのかを考える契機とすることをねらいとしています。

<シナリオ>

* 「ナレ」は「ナレーション」

日本語の音声に耳を傾けると…

導入

話をしている人物の顔を映したさまざまな映像。

ナレ [話し言葉は口から出る音、つまり「音声」で伝える言葉です。私たちは音声によってさまざまな情報を伝えています。]

第1話「気持ちや意図を伝える音声」からの映像

ナレ [例えば、声の調子を使い分けることで、さまざまな気持ちや意図を相手に伝えています。]

第2話「方言の中の音声」からの映像

ナレ [また、私たちが生活する地域による違いもあります。さらに、話をする場面や相手などにより、方言と共通語の音声を使い分けることもしています。]

第3話「外国人の話す日本語の音声」からの映像

ナレ [外国人が使う日本語の音声も、日本人の音声と違うところがあります。普段は当たり前過ぎてあまり意識することのない音声ですが、私たちのコミュニケーションを、音声を中心に考えてみましょう。]

第1話：気持ちや意図を伝える音声

1-1 「本当」

高校生の麻美と弟の小学生の和也が家の前で縄跳びをしている。

ナレ [これは、ある街角で見かけた風景です。「本当」という言葉が何回か出てきます。ちょっと会話に耳を傾けてみましょう。]

麻美の同級生の加奈が自転車で通りかかる。

加奈 「麻美！」

麻美 「(気づき、笑顔で) あっ、加奈。おはよう！」

加奈 「おはよう！」

和也 「おはよう！」

加奈 「ねえ、ねえ、知ってる？」

麻美 「なあに？」

加奈 「鈴木先生、結婚するんだって」

麻美 「えっ！ 本当？」

加奈 「うん。本当」

麻美 「えっ、でも、そんな素振り、全然なかったじゃない。
本当？」

加奈 「本当 (ホ、ン、ト、オ)。なんか優子がね、偶然二人
が歩いてるところ見ちゃって、それで直接先生から聞いたん
だって」

麻美 「じゃあ、優子は相手の人に会ったんだ。どんな人だっ
て？」

加奈 「うーん、詳しいことは分からないけど、でも、すっこ
く素敵なお人だと言ってたよ」

麻美 「へえ、本当。先生もやるなあ」

ナレ 「「本当」という表現がさまざまな口調で話されていまし
たね。もう一度「本当」の部分だけ聞いてみましょう。」

加奈と麻美の「本当」が順に出てくる。

麻美 「本当？」 【驚き】

加奈 「本当」 【中立】

麻美 「本当？」 【疑い】

加奈 「本当 (ホ、ン、ト、オ)」 【強調】

麻美 「本当」 【感心】

ナレ 「同じ「本当」という表現でも、いろいろな気持ちや意
図が伝わってきますね。」

1-2 「何やってんの」

ナレ 「さて、会話の続きを聞いてみましょう。今度は「何やってんの」という表現が何回か出てきます。」

麻美の持っている縄跳びを見て加奈が話しかける。

加奈 「ねえ、そういえばさっきからずっと気になってたんだけど、そんなもの持って、何やってんの？」

麻美 「あ、これ？ 和也がね、『お姉ちゃん、もう二重跳びなんかできないだろ』なんて生意気なこと言うから、ちょっとやってみせてたの」

加奈 「もう、弟にのせられて、何やってんの」

麻美 「(苦笑して)ほんとにね」

和也が加奈の自転車の前かごの紙袋の中のをぞき込む。

麻美 「(和也の行動に気づき) ちょっと、和也！ 何やってんの！ ひとのものを勝手にのぞいちゃだめじゃない」

和也 「だって、すごくいいにおいがしたから、何だろうって気になっちゃったんだ」

麻美 「もう、何やってんの。全くあんたは食いしん坊なんだから」

加奈 「(笑顔で) いいの、いいの。気にしないで」

今の会話場面が巻き戻される。

ナレ 「同じ表現であっても、口調によってずいぶん印象が違ってきますね。「何やってんの」の部分をもう一度聞いてみましょう。」

加奈 「そんなもの持って、何やってんの？」【質問】

ナレ 「これは、「縄跳びを持って何をしているの？」と相手に質問しているものですね。それでは、次はどうでしょう。」

加奈 「弟にのせられて、何やってんの」【からかい】

ナレ 「これは、相手に質問しているわけではなさそうです。むしろ、相手をからかっているように聞こえますね。次はどうでしょう。」

麻美 「ちょっと、和也！ 何やってんの！」【叱責^{しっせき}】

ナレ 「ひとのものを勝手にのぞいた弟をしかっているようです。最後はどうでしょう。」

麻美 「もう、何やってんの」

ナレ 「食いしん坊な弟にあきれている感じがしますね。」

画面の中央に「何やってんの」。その周りに話し手の気持ちが順々に表示される。

ナレ 「このように「何やってんの」は、文字だけ見ると「質問」の表現ですが、話し方によっては、相手をからかったり、しかったり、あきれたり、といった、話し手のさまざまな気持ちや意図が伝わる場合があります。」

画面の中央に「本当」。その周りに話し手の気持ちが順々に表示される。

ナレ 「最初の「本当」も、「本当？」(強い疑いの口調で)だと疑っている感じになりますし、「本当」(感心の口調で)だと感心しているように聞こえますね。」

画面で「何やってんの」と「本当」が点滅。

ナレ 「このように、「何やってんの」や「本当」といった文字だけでは、どのような気持や意図でこの表現を相手に伝えようとしているのか分かりませんが…」

画面で「何やってんの」と「本当」の周りに話し手の気持ちが順々に表示される。

ナレ 「話し言葉の場合、声の高さの変化や声の出し方、リズムの取り方など、声の調子を変えることによって、「感心」「からかい」「疑い」など、さまざまな気持ちや意図を伝えることができます。」

1-3 携帯メールでの工夫

大学生の千春と香織がレポートの整理をしている。携帯電話の着信音が鳴る。

香織 「千春。また、携帯。これじゃ、勉強に集中できないよ！」

千春 「今度はメール！(メールを見る)あ、恵里からだ」

恵里のメールの文面

元気？映画今週末だね。
すっごく楽しみチケット、
千春と香織の分もちゃんと
買ったよ。待ち合わせは、
映画館の入り口に1時半で
どうかな？恵里

千春 「(香織にメールを見せながら) ねえ、映画の約束、今週末って書いてあるけど、違うよね」

香織 「うん。9月の最後の週って言ってたから、今週じゃなくて来週だと思うけど、恵里の勘違いじゃない？」

千春 「そうだよ。あつ、わたし、今週末予定入れちゃったよ。どうしよう…。(慌てて) あつ、早く、返事書かなきゃ」
文面を声に出しながらメールを打つ千春。

千春のメールの文面1

映画の約束、9月の最後の
週って言ってなかった？今
週末はもう予定入れちゃっ
たよ。千春

香織 「(文面を見て) 千春、これじゃそっけなさ過ぎて、ちょっと恵里を責めてるようにも読めちゃうんじゃない？」

千春 「(文面を見直して) そう…、だね。つい慌てちゃった。ええと…」
文面を書き足す千春。

千春のメールの文面2

あれ〜。映画の約束、9月
の最後の週って言ってなかつ
た？今週末はもう予定い
れちゃったよ。千春

千春 「こんな感じかな」

文面を読む香織。

香織 「うん、いいんじゃない」

千春 「送信, と」

メールを送信する千春。

千春 「ああ, 香織に言ってもらってよかった。あのまま送ってたら, 恵里にちょっといやな思いさせちゃったかもしれないね」

香織 「うーん, 直接話しちゃえば気持ちも簡単に伝わるけど, 文章だと, 何でもないことなのに深刻そうな感じになっちゃったり, 何だか冷たく突き放した感じになっちゃうことって, あるよね」

千春 「うんうん, あるある。でも何でなんだろうね…」

携帯電話の着信音。携帯電話を開く千春。

千春 「早い, 恵里からだ!」

香織 「え, 本当?」

メールを読む。

千春 「(笑顔で) 了解, だって!」

香織 「恵里, やっぱり勘違いしてたんだ」

千春 「早速, 返信, と」

メールを返信する千春。会話する二人。

ナレ 「自分がどのような気持ちや意図でその言葉を使っているのかを相手に伝えることは, とても大切なことです。話し言葉の場合, 声の調子などから, 気持ちや意図は容易に相手に伝わりますが, 文字だけでは少し伝わりづらいことがあります。千春さんの書き直したメールを見てみましょう。」

千春のメールの文面 1

映画の約束, 9月の最後の週って言ってなかった? 今週末はもう予定いれちゃったよ。千春

ナレ 「これは千春さんが書いた最初のメールの文面です。」

千春のメールの文面2

あれ～、映画の約束、9月の最後の週って言ってなかった？今週末はもう予定いれちゃったようね 千春

ナレ [これは書き直した文面です。顔を表現した絵などを使って自分の気持ちを伝えたり、波の記号や小さな「う」の文字を使うなどしてごうけた声の調子を表現する工夫をしているようですね。]

公的・私的なパソコンメールや携帯メールの映像。絵文字の無いビジネスメールや友達同士の絵文字の入ったメールなどの映像。

ナレ [公的な場面や目上の人に対する場面では、絵文字などを使うことは失礼になることもありますごう、親しい人とのやりとりでは、自分の気持ちや意図を相手に伝えるために、時にはごういった工夫をすることもあります。]

1-4 第1話のまとめ

麻美と加奈の「何やってんの」の場面や携帯メールの映像が再び映し出される。

ナレ [ごうのように、話し言葉では、声の高さの変化や声の出し方、リズムの取り方など、声の調子を変えることによごうて、また、書き言葉では、絵文字や記号などを工夫することによごうて、自分の気持ちや意図を豊かに伝えることができます。]

第2話：方言の中の音声

2-1 卓球の全国大会の会場で各地の音声に接する

競技と応援で熱気があふれる体育館。全国から応援に来ている人々に混じごうて、中学生の純一と大学生の姉・弘子も声援を送る。弘子の親友・麻里子の両親も隣にいる。

ナレ 「ある日、卓球の全国大会が開かれました。応援の人たちも全国各地から集まっています。」

会場の人々がさかんに声援と拍手を送る。

純一 「(弘子に) 卓球って、実際に見ると、なかなか迫力あるよね」

弘子 「そうですね。麻里子の出番はまだかな…」

プログラムに目を移す弘子。

父親 「(母親に) 麻里子ノ出番ワ、何番ダツケ? (麻里子の出番は、何番だっけ?)」(平板なイントネーションで)

母親 「ソーダネー。モーソロソロダト思ウンダケド (そうだねえ。もうそろそろだと思っただけど)」

麻里子の両親の発音に目を見開く純一。

父親の先ほどの発音が繰り返される。

父親 「麻里子ノ出番ワ、何番ダツケ?」

心の中で自分の発音で繰り返す純一。

純一 「麻里子ノ出番ワ、何番ダツケ?」

純一 「(弘子に) 僕たちの言葉とずいぶん発音が違うね」

弘子 「うん、そうだね」

今度は、斜め後ろにいる年配の夫婦の声が聞こえてくる。

男性 「バーチャン バーチャン、サッキノ 試合ヤケド～ 負ケーシモーテ 残念ヤッタチャ～。最初勝ツトッタガニ～、逆転サレーシモーテ ホンマ オトマシーコッチャッタノ～ (おばあちゃん おばあちゃん、さっきの試合だけど負けてしまって残念だったよね。最初は勝っていたのに、逆転されてしまって、本当に惜しかったね)」

女性 「ホンマニネ～ オットマシーカッタチャ～。最初勝ツトッタガニ～ アッタラモンヤッタネ～ (本当に惜しかったよね。最初は勝っていたのに、惜しかったね)」

耳を傾ける弘子と純一。

弘子 「なんか、言葉の切れ目が特徴的だね」

純一 「うん」

左の方に座っている姉弟の弟が立ち上がる。

姉 「アッ、ドゴサ 行ゲー？↓（あっ、どこに行くの？）」

弟 「オレ、ナンカ ノド乾イタカラ 飲ミ物 買イニ行グドモ、ネーチャンモ 行ガネー？↓（おれ、何か のどが渴いたから 飲み物買いに行くけど、お姉ちゃんも行かない？）」

姉 「ウン、行ゲー（うん、行く。）」

白熱した試合が続く。

姉 「アッ、コノ試合 終ワルマデ チョット 待ッテデケネー？↓（あっ、この試合終わるまでちょっと待っててくれない？）」

弟 「ウン（うん）」

純一 「質問しているみたいだけど…」

弘子 「でも、『行ゲー↑』って、音を上げるんじゃなくて『行ゲー↓』って下げる言い方をしてたよね」

純一 「（楽しげに）さすが全国大会！ 発音も全国大会だね！」

弘子 「本当だね。あんたうまいこと言うじゃない！」

純一 「へへ（笑い）」

純一が方言に興味のあることに気づく弘子。

競技会場を見て弘子が麻里子の登場に気づく。

弘子 「あっ、麻里子登場！（麻里子の両親に）麻里子さんの出番ですよ！」

にっこりとうなずく麻里子の両親。麻里子を応援する四人。

ナレ 「弘子さんと純一くんはさまざまな発音に触れて方言に興味を持ったようですね。今の発音をもう一度聞いてみましょう。」

2-2 発音についての解説

(1) 平板なイントネーション（茨城県の場合）

父親 「麻里子ノ出番ワ、何番ダツケ？」

ナレ 「共通語のイントネーションとは違って文全体が平らに発音されていますね。」

「無アクセント」の分布図（＜資料＞の図1を参照）

ナレ 「単語に決まったアクセントのない「無アクセント」の地域では、しばしば文全体が平らなイントネーションで発音されることがあります。赤い色で示したところがその地域です。もう一度聞いてみましょう。」

父親 「麻里子ノ出番ワ、何番ダツケ？」

ナレ 「次はどうでしょう。」

(2) ゆすり音調（富山県の場合）

女性 「ホンマニネ～ オットマシーカッタチャ～。最初勝ットッタガニ～ アッタラモンヤッタネ～（本当に惜しかったよね。最初は勝っていたのに、惜しかったね）」

ナレ 「文の末尾や、文中の区切りの末尾の部分に、ゆるするようなイントネーションが聞かれます。」

「ゆすり音調」の分布図（＜資料＞の図2を参照）

ナレ 「「ゆすり音調」などと呼ばれ、北陸地方の富山県から福井県北部にかけて使われています。もう一度聞いてみましょう。」

女性 「ホンマニネ～ オットマシーカッタチャ～。最初勝ットッタガニ～ アッタラモンヤッタネ～」

ナレ 「次はどうでしょう。」

(3) 下降イントネーションでの質問（秋田県の場合）

姉 「アッ、ドゴサ 行ゲー？↓（あっ、どこに行くの？）」

弟 「オレ、ナンカ ノド乾イタカラ 飲ミ物 買イニ行グドモ、ネーチャンモ 行ガネー？↓（おれ、何か のどが渴いたから 飲み物買いに行くけど、お姉ちゃんも行かない？）」

姉 「ウン、行ゲー（うん、行く。）」

姉 「アッ、コノ試合 終ワルマデ チョット 待ッテデケネー？↓（あっ、この試合終わるまでちょっと待っていてくれない？）」

ナレ [相手に質問するとき、共通語では語尾を上げるイントネーションですが、語尾を下げるイントネーションを使う方言もあります。]

「下降イントネーションでの質問」の分布図（＜資料＞の図3を参照）

ナレ [地図に赤い記号で示したところがその地域です。もう一度聞いてみましょう。]

姉 「アッ、ドゴサ 行ゲー？↓」

弟 「オレ、ナンカ ノド乾イタカラ 飲ミ物 買イニ行グドモ、ネーチャンモ 行ガネー？↓」

姉 「ウン、行ゲー」

姉 「アッ、コノ試合 終ワルマデ チョット 待ッテデケネー？↓」

観客席の人々の映像。

ナレ [このように、地域によっては、方言音声が使われていますが、いつも、そうというわけではないようです。相手や場面によっては、共通語音声と使い分けられています。次にそれを見ていきましょう。]

2-3 ビデオ『方言の旅』を見る

弘子 「ただいまー」

純一 「あ、おかえり」

帰宅した弘子が、大学で借りてきたビデオのパッケージを純一に見せる。

弘子 「ねえ、これ、見る？」

タイトルに『方言の旅』と書かれていることに気づく純一。

純一 「おっ！『方言』。見せて！」

ビデオを再生する。学校の教室で、地元の男性が生徒たちに地元の方言について解説している映像が映し出される。

地元の人「はい、二番目が『キンナ、犬ガラボッカケラレデ、怖エケ（昨日犬に追いかけて怖かった）』」

ノートを取ったり板書する生徒たち。解説を続ける地元の男性。

地元の人「キンナ、犬ガラボッカケラレデ、怖エケ」

ビデオから聞こえる方言をまねて言ってみる純一。

純一 「キンナ、犬カラボッカケラレテ…、怖エケ」

弘子 「キンナ、犬ガラボッカケラレデ、怖エケ」

何度か繰り返す純一。

弘子 「(純一に) あっ、いい感じ、いい感じ」

純一 「山形県のこの地方では、『犬ニ』を『犬カラ』って言うんだね」

弘子 「うん。それに、『カラ』が『ガラ』って濁って、発音も変わるわけだね」【注：「ガラ」の「ガ」は鼻にかかる鼻濁音ではないので注意】

純一 「へえー。あ、じゃあ「雪」も「ユギ」って言うのかなあ。面白いね！」【注：「ユギ」の「ギ」も鼻濁音ではないので注意】

弘子 「今度行く鶴岡市も山形県だよ」

純一 「僕たちも『方言の旅』だね」

(注) 映像の中に出てくる方言のビデオは、国立国語研究所が制作した本シリーズ第3巻『方言の旅』です。お問い合わせは東京シネ・ビデオ株式会社までお願いします。

〒103-0022 東京都中央区日本橋室町1-8-8

電話 03-3242-3151 FAX 03-3242-3182

<http://www.tokyocine-video.co.jp/>

2-4 鶴岡市のデパートで

JR鶴岡駅の映像。

純一 「(モノローグ) 休日を利用して、山形県鶴岡市に家族で来た。ここは、前にビデオで見た方言が使われているところの隣町だ。地元の言葉がいろいろ聞けるかなあ？」

弘子、純一と両親が駅舎から出てくる。

弘子 「結構、寒いね。あっ、手袋忘れた。(駅前のデパートを見て) 買ってくるね」

純一 「あ、僕も行く！」

弘子 「(両親に) 行ってくる！」

デパートの売り場で。

弘子 「(手袋を店員に渡し) お願いします」

店員 「いらっしゃいませ。ありがとうございます。2500円です」

弘子 「あっ、すぐ使いますから、包まなくて結構です」

店員 「それでは、値札はとっておきましょうね」

弘子 「お願いします」

店員 「あしたも、雪(ユキ)になるみたいですよ」

純一 「(モノローグ) あれ? 『ユギ』じゃなくて『ユキ』って言ってる…」

ナレ 「純一くん、ちょっと戸惑っているようですね。実はこういうことなのです。」

猫のアニメーション

ナレ 「動物の「猫」のコをどう発音するか調査した結果があります。」

国立国語研究所が鶴岡市で調査した発音の使い分けに関する調査結果のグラフ

ナレ 「国立国語研究所が、1992年に山形県鶴岡市で、175人の市民を対象に行った調査です。鶴岡市ではもともと「ネゴ」のようにゴで発音していましたが【注:「ゴ」は鼻にかかる鼻濁音ではないので注意】、共通語の影響を受けて、今では「ネコ」とコで発音する人も少なくありません。グラフを見ると、「よそから来た初対面の人」と話す時は「ネコ」と共通語の音声で言う人が多いことが分かります。ところが、家族や友達と話す時はその割合が減り、「ネゴ」と方言の音声で言う人が半数近くまで増えます。初対面だけでも地元の人と話す時は、ちょうどその中間になります。このように、共通語の音声を使うか、方言の音声を使うかは、話をする相手によりずいぶん異なります。」

再びデパートの店員と弘子が話す場面。

ナレ 「お店の人が弘子さんに共通語の音声で話したのも、仕事の場であり、また弘子さんと知り合いではなかったからです。」

国立国語研究所が鶴岡市で調査した単語アクセントの使い分けに関する調査結果のグラフ

ナレ [音声の使い分けは、実は単語のアクセントにも見られます。先ほどの動物の「猫」は、共通語では^ネコ【「高低」のアクセント】というアクセントですが、ここの方言では、もともと^ネコ【「低高」のアクセント】と発音されます。共通語の^ネコというアクセントは、「よそから来た初対面の人」から「地元の初対面の人」、「家族や友達」になるにつれて減少します。これに代って増えてくるのは、方言の^ネコというアクセントです。

生活の中で、方言と共通語が使い分けられている様子を、もう少し詳しく見てみましょう。]

2-5 ホテルのフロントで

チェックインする純一たち家族。フロント係の佐藤が部屋のキーを渡しながら言う。

佐藤 「寒くなりましたね。あしたも雪（ユキ）になるそうですよ。どんがら汁でも食べて風邪ひかないようにしてくださいね」

弘子 「あの一、どんがら汁ってどんな料理ですか？」

佐藤 「日本海で獲れた^{たら}鱈と豆腐や大根なんかを味噌で煮込んだ鍋ですよ。体が温まりますよ」

純一 「おいしそう！」

弘子 「（純一に）おいしそうだね！」

佐藤 「ぜひ、お試しください」

フロントから離れる家族。
郷土料理の店でどんがら汁を味わう純一たち家族。

2-6 翌朝フロントで

窓の外では雪が降っている。部屋のキーを預けにフロントに近づく純一。引継ぎが終わり、フロント係の佐藤と同僚が方言で話している。

佐藤 「きんなはでんぶさんぶっけのー（昨日はだいぶ寒かったね）」

同僚 「んだのー（そうだね）」

立ち止まる純一。

佐藤 「やっぱり、雪（ユギ）さなったのー（やっぱり雪になったね）」

同僚 「続くのー（続くね）」

窓の外は雪が降り続く。

同僚 「けっこう積もってきたもんなー（けっこう積もってきたものね）」

佐藤 「きょうは早起ぎして嫁と雪かぎ（ユギカギ）だ（きょうは早起ぎして妻と雪かきだ）」

同僚 「おれも帰ったらやんねばねーであ（私も帰ったらやらなければいけない）」

二人をながめる純一。

同僚 「今年もさんぶぐなんなんがなあ（今年も寒くなるのかなあ）」

フロントまで歩いてくる純一。それに気づく二人。

佐藤 「（純一に）あ、おはようございます」

同僚 「（純一に）おはようございます」

純一 「おはようございます」

同僚 「（佐藤に）それではお願いします」

純一が佐藤にキーを渡す。

純一 「お願いします」

佐藤 「はい、いってらっしゃい」

純一 「（モノローグ）聞いてみようかな…」

ためらう純一。

佐藤 「なにか？」

純一 「あのー、地元の方ですか」

佐藤 「はい。代々、ここです」

純一 「あのー。さっき、『ユギ』とか『ユギカギ』って言ってま

したけど、僕たちと話すときはあまり言わないんですか？」

佐藤 「ああ、聞こえましたか。『ユギ』ですか。お客様の前では、まず言いませんね。仕事の間ですし、いろいろなところからくるお客様には共通語の発音のほうが分かりやすいですからね。でも、家族や友達、職場の仲間どうしでは『ユギ』ってよく言いますよ」

純一 「つまり、使い分けているということですか？」

佐藤 「はい。東京の方も家族や親しい人とは、改まった言葉遣いはしないんじゃないでしょうか？」

純一 「(納得して) ああ、そうですよね。(その場を想像して) おかしいですよ」

佐藤 「それと同じようなものだと思います。ところで、どんがら汁は食べましたか？」

純一 「はい。食べました。おいしかったです！」

佐藤 「そうですね！きのうの夜、雪が降ってきて、あんまり寒いので私もどんがら汁作ってもらいましたよ」

佐藤に鶴岡市の名所などを聞く純一。

ナレ 「このように、相手や状況によって、方言の音声と共通語の音声との使い分けが見られます。こうした使い分けは、鶴岡市だけではなく、多くの地域に共通して見られます。」
鶴岡市内の名所を見物する純一たち家族。

純一 「(モノローグ) 僕たちは雪の鶴岡をあちらこちら訪ねた」
八百屋でお店の人にめずらしい野菜について聞く。

純一 「街を歩きながら鶴岡の人たちとふれあうこともできた」

第3話：外国人の話す日本語の音声

3-1 路上で外国人が話す日本語を耳にする

小春日和の都会の路上。大学生の千春と香織が友達の弘子を待っている。

千春 「あー、いい天気。なんだか眠くなっちゃう」

香織 「ほんと。弘子も寝坊しちゃうわけだよ。先に行って

ようよ」

千春 「そうだね。弘子には、先行ってるってメール入れとく」

歩き出す二人。しばらく行くと、前方から日本人と外国人のビジネスマンが日本語で会話しながら歩いてくる。

日本人「来週、取引先との交渉があるでしょう」

外国人「その来週の交渉ですけどお、やっぱり実際のモデルを持って行って発表した方がいいと思いますけどもお」

日本人「うーん、そこまでしなくてもいいんじゃないかなあ」

外国人「そうですか…」

ビジネスマンたちが通り過ぎる。

千春 「なんか難しそうな話だったね」

香織 「うん、でも外国語でビジネスの話なんてすごいなあ」

外国人の父親と日本人の母親と子供の家族連れが日本語で会話しながら歩いてくる。

子供 「ねえねえ、お父さん、合唱発表会、来る？」

父親 「合唱発表会？」

母親 「ほら、来週の土曜日のよ」

父親 「ああ、小学校の発表会か。そうだったね。まだ一回も行ってないね」

子供 「来てねえ」

家族が通り過ぎる。

千春 「ねえねえ、日本人と外国人のカップルって増えてるって思わない？」

香織 「あー、そうだね。実はうちもね、いところが外国の人と結婚してるんだ」

千春 「へえ、そうなんだ。何語でしゃべってるの？」

香織 「うーん、子供とは英語で話して、二人の間では日本語で話してるみたい」

千春 「へえ、子供はバイリンガルかなあ」

地図を広げた二人の外国人（AとB）が日本語で話しながら歩いている。

A 「今、この交差点にいる。」

B 「そうですか？ だってここは銀行じゃなくて喫茶店だよ」

A 「そうですか？ こっちには郵便局がある。あれえ？」
信号で立ち止まっている香織と千春に気付き道を尋ねる。

A 「あの、すみません」

香織 「はい」

A 「(方向を指さして) 六本木一丁目駅は、こっちでいい
ですか？」

香織 「えっ、六本木一丁目？ 反対ですよ」

B 「え？ そうですか？ こっちじゃないんですか？」
いっしょに地図を見ながら

香織 「今、ここですよ。まっすぐ行って、3つ目の交差点
を左に曲がってください」

B 「あっ、そうですか。まっすぐ行って、3つ目の交差
点を左です」

香織 「はい」

A・B 「ありがとうございます」

3-2 タイ料理のレストランで

タイ人の店員が注文をとりに来る。

店員 「(笑顔で) いらっしゃいませ。ご注文は？」

千春 「(メニューを指して) このタイ風サラダって辛いからですか？」

店員 「いいえ、少しあっさりした味で、とってもおいしいで
すよ」

千春 「じゃあ、それと、このCセットを2つください」

店員 「ちょっと時間がかかりますけど、いいですか」

千春 「はい」

店員 「わかりました。少々お待ちください」

店員が去る。

香織 「今日はいろんな外国の人に会うね」

千春 「ほんとにいろんな人がいるねえ」

香織 「弘子が言ってたけど、今、日本って住んでる人の100人

に1人は外国人なんだって」

千春 「へえ、そうなんだ。あ、そういえば、弘子は日本語の先生目指してるんだっけね」

香織 「日本も、いろんな国の人と一緒に暮らすことが普通になっていくんだね」

千春 「そのときの言葉ってどうなるんだろう？ やっぱり英語かなあ」

香織 「でも、外国の人でも日本語を話す人って結構多いよね。あっ、今日見かけた人たちも、みんな日本語で話してたし」

千春 「そうだね。でもさあ、なんか、こう、特徴のある日本語だったよねえ」

店員が「少々」と発音している映像。

香織 「そういえば『少々』の『しょう』がなんか短いような…」
店員が「あっさり」と発音している映像。

千春 「小さい『っ』もなんか短めだよ。いろいろな言語の人に共通して難しい日本語の発音ってあるのかなあ」

遅れた弘子が駆け込んでくる。

弘子 「あーっ、遅れてごめんね」

香織 「あー、ちょうどいいところに来た。ねえ、外国の人って、日本語の小さい『っ』とか、伸ばす音って苦手なの？」

弘子 「えっ？ 何なの、いきなり」

千春 「弘子って日本語の先生の勉強してるんでしょ」

弘子 「ちょっと待って。注文してから！」

3-3 弘子の解説

注文が終わって弘子が説明を始める。

弘子 「それじゃ、お答えしましょう。例えば、俳句とか短歌を詠むときのことを考えてみて」

うなずく二人。

弘子 「『かきくえば かねがなるなり ほうりゅうじ』みたいに、二人はちゃんと五・七・五のリズムに合っているかど

うか簡単に数えることができるでしょ」

香織が思いついて。

香織 「『こまったぞ しゅくだいわすれ しんがっき』とかね。」

弘子 「そのときに数える一拍一拍は、小さい『っ』も伸ばす音も、
他の音と同じように一つ分の長さを感じてるわけでしょ」

千春・香織 「うんうん」

弘子 「でも、外国語の中には、小さい『っ』とか伸ばす音も他
の音と同じ一拍っていう感覚がないことが多いんだって。」

香織 「へえ、そうなんだ」

弘子 「だから、多くの外国人は『っ』とか伸ばす音を一拍分と
して聞き取ることも難しいし、発音するのも難しいらしいよ」

千春 「なるほど、だから私たちには短く聞こえたり、発音さ
れていないみたいに聞こえちゃうんだ」

弘子 「それに『っ』とか伸ばす音が短いと意味まで変わった
りすることもあるし」

香織 「どういうこと？」

弘子 「うーん、例えば『きって（切って）ください』『きて（来
て）ください』『きいて（聞いて）ください』とか」

香織 「あっ、ほんとだ」

弘子 「外国の人はこの区別ってとっても難しいんだって」

二人とも納得。

弘子 「そういえば、千春の名字は『大場』だよな」

千春 「え、何？ それがどうかした？」

弘子 「外国の人が「おおばさん」って言うと、「おおば」の「お
お」が短くなって」

千春 「（つぶやきながら）おおばさん、おおばさん、…あっ、『お
ばさん』だ」

弘子 「そう聞こえるかもね」

微笑む三人。

3-4 異なる発音が存在することの背景を考える大切さ

料理が運ばれ、食事をする三人。

千春 「何か弘子のこと見直しちゃった」

香織 「ほんと、おかげでいろいろ勉強しちゃったな」

弘子 「実は来週、試験でさ、昨日の夜ちょうどそのことを勉強してたんだよね」

千春 「それにしても、今日はいろんな発音を聞いたよね」

香織 「うん。でも、そういう発音とか、話し方のくせみたいなもので、その人に対する印象が左右されるってことない？」

千春 「あー、あるかも…。あれ？ でもそれって私たちが話してる日本語でも同じじゃない？」

香織 「そういえば、日本語も地域ごとにいろんな発音があるよね」

千春 「そうだね、発音とか言い方に違和感があっても、実はそうなるのにはわけがあるのかもしれないのね」

弘子 「うん、それだけでその人のことを判断するっていうのはおかしいよね」

香織・千春 「そうだね」

ナレ 「三人とも今日は日本語の音声についていろいろなことを学んだようですね。」

まとめ

作品に出てきたいくつかの映像が出てくる。

ナレ 「普段、あまり意識することなく使ったり聞いたりしている音声。さまざまな音声がどのような背景で存在しているのか、また、どのような働きを持っているのか、ときには立ち止まり、振り返って考えてみることは、円滑で豊かな言語生活を送る上で大切なことではないでしょうか。」

<資料>



東京方言や京都方言は、単語によって高く発音する位置が決まっている方言です。それに対して、北関東や東北南部、九州中部などでは、単語に決まったアクセントのない「無アクセント」の方言が使われています。このような地域では、共通語のイントネーションとは違って、しばしば文全体が平らなイントネーションで発音されることがあります。

図 2

ゆすり音調の分布



富山県・石川県から福井県北部にかけての地域では、文の末尾や、文中の区切りの末尾の部分に、波打つような独特のイントネーションがよく使われます。これは「ゆすり音調」などと呼ばれて北陸方言の特徴となっています。

図 3

下降イントネーションでの質問の分布



1989～1992年に行われた「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」による調査では、全国74地点で、5つの疑問文についての音調が記録されています。このうち、1回でも下降イントネーションで質問をした地点を地図に三角の記号で示しました。相手に質問するとき、共通語では語尾を上げるイントネーションを使うのが一般的ですが、語尾を下げるイントネーションを使う方言もあることがわかります。(音調の聴き取りについては鹿児島大学教授・木部暢子氏の協力を得ました。)

<話し合いのために>

第1話に関連して

- ① 「本当」や「何やってんの」を、場面や状況を設定しながら、さまざまな気持ちや意図で発声してみましょう。ビデオに出てきた気持ちや意図の他に、どのようなものがあるでしょうか。また、「本当」や「何やってんの」以外の表現でも試してみましょう。例えば「ハンバーグ」という、名詞だけのとても簡単な表現でも、色々な場面、状況で言い方がかわってきますね。
- ② ビデオに出てきた4つの「何やってんの」をもう一度聞いて、声の調子を比較してみましょう。例えば、「何やってんの」の、始まりの「な」や、終りの「の」の声の高さや強さ、長さはどうでしょうか。「何やってんの」全体の長さはどうでしょうか。
- ③ 話し手の気持ちや意図の表現には程度の差があります。例えば「本当」を例にして、少し疑っている場合から、かなり疑っている場合まで、いくつか発声してみましょう。そして、声の調子がどのように変わるか、比較してみましょう。
- ④ さまざまな気持ちや意図で話す場合、声の調子の他に、どのようなことに気を付けたらよいでしょうか。例えば、表情はみな同じでしょうか。
- ⑤ メールや手紙など、文字で人に何かを伝える時、自分の気持ちや意図がうまく伝わらなかったことはありますか。また、気持ちや意図をうまく伝えるために、どのような工夫をしていますか。
- ⑥ さまざまな気持ちや意図で発声された「本当」や「何やってんの」を、もしメールで伝えるとしたら、どのように書きますか。また、千春さんのメールを声に出して読み上げるとしたら、どのように発話しますか。音声の場合と文字の場合を比べてみましょう。

第2話に関連して

- ① 旅行をした時にその土地の言葉を聞いて、自分の話す言葉と発音が違うと感じたことはないでしょうか。それはどんな音声だったでしょうか。
- ② 自分の話す言葉の音声やアクセントやイントネーションにはどんな特徴があるでしょうか。共通語と違う発音があるでしょうか。例えば、「猫」はどのように発音しますか。「橋」「箸」「端」,「雨」「鉛^{あめ}」などでアクセントの違いはありますか。また、発音やアクセントの違いで誤解したり誤解されたりしたことはありますか。
- ③ 使っている単語は共通語なのに、発音の面では出身地の特徴が現れているような場面に出会ったことはありませんか。例えば、関西出身の人はその発音ですぐわかると言いますが、共通語の発音とどういうところが違っているでしょうか。
- ④ 皆さんの地域では、相手に質問するときの文末のイントネーションはどうなっているでしょうか。例えば、「あしたも買い物に行く？」の「行く？」はどうでしょうか。逆に、相手からそう聞かれて「うん、行く」と答えたとしたら、「行く」のイントネーションはどうなるでしょうか。
- ⑤ 家族や友達などで、皆さんがいま住んでいる所以外の出身の人はいますか。もしいる場合、電話などで生まれ故郷の人と話をするとき、普段と言葉を変えていないでしょうか。そのとき、発音や単語のアクセントやイントネーションも変えていないでしょうか。もし変えているとしたら、どこをどのように変えているでしょうか。
- ⑥ 「PTA」(父母と教師の会)の「T」は普段どう発音しているでしょうか。「ティー」でしょうか、それとも「テー」でしょうか。年齢による違いはありそうでしょうか。
- ⑦ 職業により発音や声の出し方に違うところはないでしょうか。例えば、お寿司屋さん、八百屋さん、デパートの店員、銀行員とを比べて、「いらっしゃい」や「いらっしゃいませ」

というあいさつ言葉の発音に何か違いがありそうでしょうか。

第3話に関連して

- ① ビデオに出てくる外国人の日本語には、促音（例：あっさり）や長音（例：しうしう）の他にどのような特徴があるでしょうか。例えば、交差点で道を尋ねている外国人やレストランの店員さんの日本語にはどのような特徴があるでしょうか。発音、アクセントやイントネーションなど、音声のさまざまな要素に着目して考えてみましょう。
- ② 日本語には促音や長音の有無によって意味が変わるものがあります。「きって(切って)」「きて(来て)」「きいて(聞いて)」のような組み合わせの他にどのようなものがあるか考えてみましょう。
- ③ 日本語の音声と外国語の音声はどのような点で違っているでしょうか。またどのような点で似ているでしょうか。英語など、これまでに学習したことのある外国語を取り上げて比べてみましょう。
- ④ 英語など、これまでに学習したことのある外国語を皆さんが実際に話したり聞いたりするとき、日本語の影響は見られますか。あるとすればどのようなところに見られますか。
- ⑤ これまでに外国の人と日本語でコミュニケーションをしたことがありますか。そのとき、どのような難しさがありましたか。また、これからの多文化の社会に向けてどのようなコミュニケーションをしていきたいと思いませんか。

<参考文献>

- NHK放送文化研究所編（1998）『NHK日本語発音アクセント辞典 新版』日本放送出版協会
- 国立国語研究所編（2002）『新「ことば」シリーズ15 日本語を外から眺める』国立印刷局
- 国立国語研究所編（2003）『新「ことば」シリーズ16 ことばの地域差—方言は今—』国立印刷局

<制作体制>

ビデオ作品制作委員会

(○は委員長)

加藤 昌男 (財団法人NHK放送研修センター 日本語センター
エグゼクティブ・アナウンサー)

品田 雄吉 (映画評論家 多摩美術大学名誉教授)

中神 智文 (文化庁文化部国語課 国語調査官)

藤井 千恵子 (東京都足立区立梅島小学校 校長)

以下、国立国語研究所

井上 文子 (情報資料部門第一領域 主任研究員)

小河原 義朗 (日本語教育部門第一領域 研究員)

○尾崎 喜光 (研究開発部門第二領域 主任研究員)

小磯 花絵 (研究開発部門第二領域 研究員)

佐々木 和彦 (管理部 会計課長) *平成17年10月31日まで

富澤 広 (管理部 会計課長) *平成17年11月1日から

制作会社 東京シネ・ビデオ株式会社

制作 横川 元彦

プロデューサー 川尾 俊昭

脚本・監督 富永 一

「ことばビデオ」シリーズ
〈豊かな言語生活をめざして〉5 解説書
日本語の音声に耳を傾けると…

平成18年3月

編集・発行 独立行政法人 国立国語研究所

〒190-8561

東京都立川市緑町3591-2

電話 (042) 540-4300 (代表)

FAX (042) 540-4334 (代表)

ホームページ <http://www.kokken.go.jp>

印刷者

株式会社 絢文社

〒173-0036

東京都板橋区向原3丁目10番2号

電話 (03) 3959-3960

